Summer program for young ecologists: Long-term monitoring in Lake Biwa

若手研究者のための夏季観測プログラム in 琵琶湖

奥田 昇
（京都大学生態学研究センター・准教授）

開催日 —— 2013年8月17日（土）～8月23日（金）
開催地 —— 滋賀県近江八幡市沖島
および生態学研究センター
講師 —— 奥田 昇・中野伸一・陀安一郎
（京都大学生態学研究センター）
TA —— 藤永承平（京都大学生態学研究センター）
技術職員 —— 小板橋忠俊・合田幸子
（京都大学生態学研究センター）
参加者 —— 京都大学理学部生3名、
国費留学研究生（フィリピン）1名、
計10名

◎観測結果
http://goo.gl/z7DyGi

◎個人研究レポート
http://goo.gl/mFVR53

標記の公募ワークショップが、京都大学理学部の陸水生態学実習およびJaLTERと合同で開催されました。本ワークショップは、地球温暖化、富栄養化、外来生物移入などの人為撹乱が湖沼生態系の在来生物群集に及ぼす影響を把握することを目的とした若手研究者のための長期生態系観測プログラムです。

当センターの共同研究拠点事業として、公募実習から公募ワークショップにリニューアルして今回が2回目の開催となりました。単に名称が変わっただけではありません。知識や技術を受動的に習得する「実習」と異なり、「ワークショップ」は、自ら体験し、グループの相互作用を通して双方向に学び、創造する作業です。世界有数の古代湖である琵琶湖の生物多様性の現状を把握し、その生態系から生み出される多様なサービスを体験し、それらを守るためになすべきことを参加者たちで話し合い、実践することを目標としました。

本ワークショップは学生のみならず、若手研究者を広く対象とします。近年、長期生態系観測調査の科学的重要性や社会的関心が増していますが、研究者の個人的努力によって継続できる調査期間はせいぜい半世紀です。生態系観測を文字通り「長期」運営するには、その学術的意義を認識し、調査活動を受け継ぐ次世代の育成が必要不可欠です。

初日は座学として、琵琶湖の生物多様性の成り立ちや人間活動による生態系の変遷過程について講義をおこないました。2日目から2泊3日で沖島の民宿に滞在しながら、フィールド調査を実施しました。沖合と沿岸の調査定点において、物理・化学環境の計測、および、プランクトン・ベントス・魚類の採集を行いました。

沖島は、わが国で唯一、人が住む湖沼島です。人口はたった340人ですが、切り立った断崖に囲まれた島内のわずかな平地に民家が密集しています。道幅が1mに満たない路地の両脇に所狭しと軒を連ねる集落の風景はさながら昭和30年代にタイムスリップしたかのよう。この島はかつて漁師町として栄えましたが、産業構造の変化と過疎化により、今では古老が営む民宿がわずか2軒残るのみです。宿泊施設をもたない当センターにとって、フィールドステーションの確保は死活問題。民宿業を営む新たな担い手を切に願うばかりです。

ところで、常宿「島の宿」でもてなされる湖魚料理を満喫するのも、本ワークショップの定番となっています。今回、食卓に上った琵琶湖産生物は9種類、このうち、4種が琵琶湖の固有種でした。参加者たちは、生物多様性から生み出される生態系サービスを舌で実感したことでしょう。

今回のワークショップは、フィリピンから国費留学生が参加したこともあり、前年の木曽でのワークショップに続き、講義から成果発表・

近江の湖魚文化を堪能

討論に至る全行程を英語で実施しました。アジアの発展途上国では、湖沼の富栄養化が深刻な環境問題となっていますが、これは過去に琵琶湖がたどった軌跡でもあります。富栄養化を克服し、生物多様性が回復しつつある琵琶湖の観測活動から多くを学び、アジアの湖沼生態系の再生に貢献しうる国際的な研究者となって羽ばたいてくれることを期待します。

なお、本ワークショップによる観測調査結果および個人研究レポートは、上記のURLより閲覧可能です。調査データおよび定量採集生物標本は、共同利用申請を通じて、その研究目的および意義が適当と判断された場合に利用することが可能です。